

11
学 図 小国637

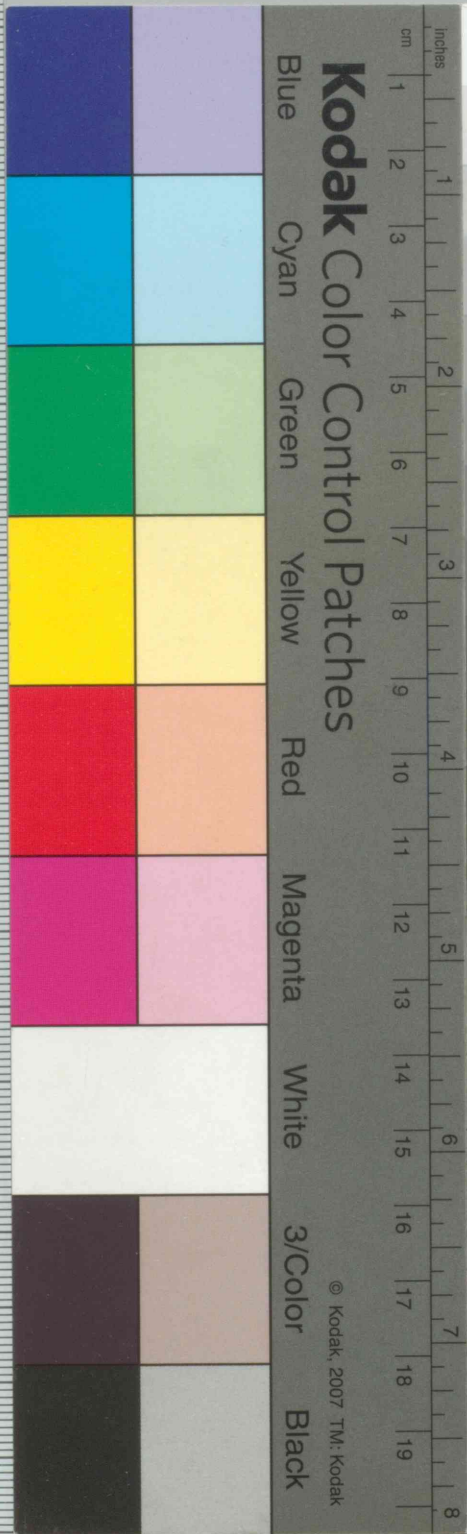
文 部 省 検 定 済 教 科 書
財 団 人 教 育 図 書 研 究 会 編 修

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449751

六年生の 国 語 下

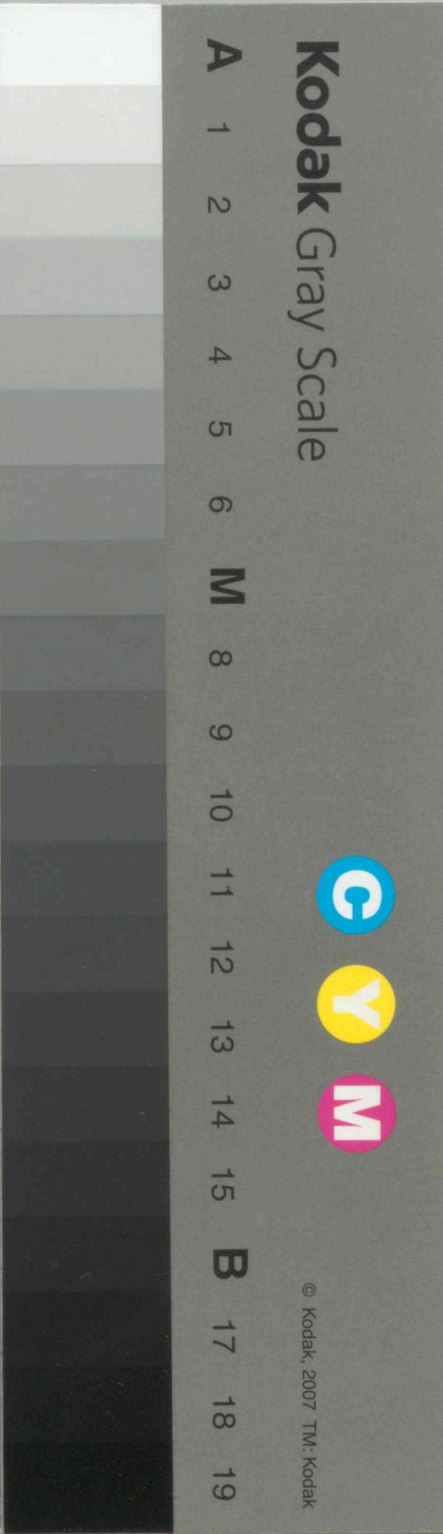
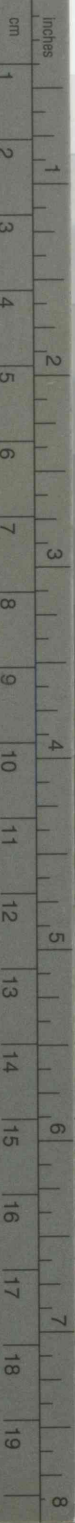


学校図書株式会社発行



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60323
教科書文庫
6
810
34-1950
01304
49751



寄 贈

教科書文庫

6

810

34-1950

0130449751

六年生の国語 下



学校図書株式会社

広島大学図書

0130449751



広島大学
教育学部図書

中央図書館

広島大学図書

0130449751





もくろく

一 アメリカだより 四

かわいいカナリヤ 五

朝飯と夕飯 七

あたたかい風の子 十三

電波科学の発達 十六

二 他山の石 二十

石にちなむことば 二十

ようこそデンマークへ 二十三



三 鉄道開通 三十二

四 ともに歩む 六十

ともに歩む 六十

天分を生かす 六十六

五 光を求めて 七十三

ことばの表 七十八

漢字の表 八十



一 アメリカだより

ラジオをお聞きの日本のみなさん、アメリカにいる日本人も、カナダや、それからメキシコやブラジルそのほか中南米にいる日本人もみな、遠い日本においてになるみなさんのことを思っております。海外にいる日本人のだれひとりとして、日本が一日も早くよい国になるようにいのらない者はありません。日本のみなさん、みなさんは何よりもだいいじなほこりをうしなわないで、みなおたがいに助けあい、日本をほんとうに住みよい平和な国にしてくださいるようにおねがひいたします。それでは、これからアメリカだよりをお送りいたします。

かわいいカナリヤ

かわいい日本のカナリヤが、寒い寒い北太平洋を飛行機でたつて、クリスマスまえのアメリカへまいりました。金色にかがやくまつき色なのや、あたたかそうなオレンジ色のや、おちついた青い色をしたのなど、いろいろです。見るもの聞くもの日本とはすっかりちがいますので、心配してチーチーなきかわすのもいます。このカナリヤたちは、大きな飛行機に乗ってきたのです。コロラチュラ・ソプラノのだいいじななどをいためないように、電気でへやの中をあたためた飛行機でした。ほうぼうの町へ送られました。ニューヨークではブロードウェイの、ある大きなデパートに二百ぱいっしよでした。日本から飛行機

でやってきた日本生まれのカナリヤは、いったいどんな顔をしているのかしらんと、そのデパートの八かいは一ぱいの人です。だれもかれも、「オー・キュート」と感心しています。キュート、というのはいかにもいいという意味でしょう。よくなくのも、だまっているのも、じょうずにコロコロとさえずるのもいます。見ているうちに、どんどん売れていきます。クリスマスプレゼントにとどけてくれといっている人もあります。ふとったのも、やせたのも、このいきおいではすぐ売り切れましょう。やさしいアメリカの人たちに買われていって日本のカナリヤは楽しい生活をおくることでしょう。家々のまどからさえずりかわすカナリヤたちのほがらかな歌声を早く聞きたいものです。

朝飯と夕飯

アメリカ人はよく働きます。ちゃんと仕事のけじめをつけて、順序よくはかどらせています。よそへ働きにいったってお金をとっている人が六千万人ばかりありますが、その三分の一は婦人です。つまり、およそ二千万の女の人が働きにいらっているわけにあります。

アメリカの電車では運転手が



フィラデルフィヤ市街

車しよをかね、ゆっくり腰をかけてスイッチを動かして
ますが、この電車の運転手をやっている婦人もあります。小学
校やハイスクールの先生も女の方が多い。また農場や店をけい
えいしている人もあれば、弁護士や裁判官になつてゐる人もあ
ります。大きなデパートの支配人だとか、会社の社長、政府の
上の方などにも婦人が活動してゐます。こういう婦人がたは、
朝何時から夕方何時までと、毎日規則正しく働いておりますか
ら、家の中の仕事を合理的に短い時間でかたづけようにつと
めております。食事のしたくにいたしましても、お米をあらつ
てごはんをたき、みそしるをつくり、というように、一から十
までやつていては、時間がかかつてやりきれませんから、一か
ら八くらいまでの下準備をしてある材料を使ってさつさとやつ
てのけます。

まず朝ごはんならコーヒーですが、ガスを使うばあいは、ひ
とりでにお湯がわいたら自動的にガスがとまり、ただ、小さな
火だねだけがついてゐる自動ちようせつのお湯のタンクがあり
ますから、コーヒーはすぐわきあがります。フライパンか、こ
われないうガラスの厚板の上でベーコンかハムといつしよにたま
ごを焼く。ベーコンもハムもちゃんと切つたのを売つてゐます。
パンを焼くには電気トースターが便利です。電気トースターは
パンを二きれほうりこむと、いいぐあいにきつね色に焼けたと
ころでぽんとでてきます。それをおさらにとつてつぎのパンを
トースターに入れるのです。パンは機械で切つてあるか、でな
ければ家庭でふつうの料理ナイフで切ります。パンができたら、

ぶどうかオレンジのジュースのかんづめを冷蔵庫から取り出してコップにつきわける。これで朝食の用意はすっかりできあがりしました。時間になるとせいぜい五分か六分です。子どもが学校に行く家では、サンドウィッチをつくって、あぶら紙につつまみ、くだものやおかしといっしょに紙ぶくろに入れてやる。ベントウばこをあらったりするてまがかかりません。

朝食はたいてい台所で食べます。台所といってもきれいに整頓してありますから、気持がわるいようなことはありません。夕食も台所で食べる家がたくさんあります。アメリカのすまいでは、台所がいちばん明かるいところになっているのです。

朝食がすみますと、ご主人がテーブルの上にあったバターやゼリー、ジャム、クリーム、牛乳などを冷蔵庫にしまいます。お

くさんはあらいの場のせっけんをどかしたお湯でコップやおさらを手早くあらひ、きれいにゆすいだのを子どもさんがふいてそばの戸だなにかたづけします。

さて今度は夕飯です。まず順序としてはビフテキにするか、牛肉とぶた肉とを半分ずつまぜてひき肉にしたものか、玉ねぎをきざんだのとたまごをいっしょにねったおだんごを焼くか、一寸角ぐらいに四角に切ったひつじの肉の間に玉ねぎやトマトをはさんでくしにさしたのをあぶり焼きにするか、とにかくメーン・デイツシュになるおもなおかずをまずきめます。そしてそれを焼くかにかかっている間にスープのかんづめをあけて、それに同じ量の水を加えたものをあたたため、農場でセロファン包みにしてこおらせた青えんどうかまたはえだまめをなべにう

つし、バタを入れて火にかけます。肉でも野菜でも、れいとうにしたのがだんだんに使われるようになってまいりまして、ただいまは十けんのうち七けんまでは、一か月に少なくとも八度ぐらいれいとうにした食料品を用いています。夕飯にはなまの野菜がほしいので、冷蔵庫の中の野菜を入れるひきだしからセロリか西洋チサをとり出して簡単なサラダをこしらえます。

夕飯は、みんなくつろいで話をしながらそうとう時間をかけて食べます。それからまたあとかたづけですが、おくさんがひとりてやるのではなく、子どもさんもご主人も、また心やすい友だちなどがよばれていたときは、その人たちもいつしよに手つだうのがふつうであります。

あたたかい風の子

アメリカでもずっと北の州では、北海道や東北地方と同じくらい寒いところがあります。自動車のエンジンをひやすため、ふつうは水を入れますが、冬にはアルコールその他のものをまぜた特別の液体を使います。水ですとエンジンをとめるとこおります。こおるとふくれますから入れものがはれつしてしまいます。それで一ガロン八百円もお金をだして、こおらない液体を入れておくのです。

そういう寒い地方の子どもたちは、学校へ行くのに女の子もふつうの服の上からあたたかいもんぺのようなものをはきます。もんぺよりもびったりからだに合ったもので、くつの上から長

いゴムの雪ぐつをはいて、その上にもんぺの下の方をおろし、ジッパ―でしめます。雪の中にふみこんでも、雪ぐつの中に雪がはいる心配がありません。うわぎの上にも、腰のへんまでくる雪よけのジャケットを着て、耳がしもやけにならないように耳あてをつけた上から、かわいいずきんをかぶり、毛糸の手ぶくろの上にミッテンというスキーに使うような指なしのうわ手ぶくろをはめて、元気よく出かけます。

アメリカ人は、小学校の生徒もハイスクールや大学のわかい人たちも、かさをさすのをいやりません。しかしハイスクールや、大学の女学生たちは、そんなもんぺ式のものをはきません。雪ぐつをはくだけで、雪がふついているとき頭にかぶるものはベレーかスカーフですが、何もかぶらないで教室に走りこむ人も

あります。男の学生はめったにぼうしをかぶりません。学校の建物にはいるとあたたかいので、小学校の子どもたちは雪ぐつやもんぺ、ジャケットなどをぬぎます。

雪なげをしたり、雪だるまをこしらえたりするのは、日本と同じです。池や湖は厚くこおりますから、スケートにもってこいです。学校の帰りに遊ぶため、スケートぐつのひもを長くむすび合わせて、かたにひっかけて行っているのをよく見ます。スケートやスキーに行くにも、なかのよい男の子と女の子がそろって出かけます。女性をいたわる国ですから、ふつうの日はどうかすると男の子が女の子の教科書を持っていることもありますが、スキーに行くときには女の子も自分でかついで登ります。

寒いときの子どもたちののみものはあついチョコレートです。これをハッチョクとっています。ハイスクールまではコーヒ―をのみません。雪まみれになって帰ると、家の中にはいる前にもんぺ式のものや、雪ぐつやジャケットなどをぬぎます。あまり寒い日には、おかあさんに新しいほうきかなにかでざつと雪をはらいおしてもらって、家の中にはいつてからぬぎます。ぬいだものはスト―ブのそばにかけてかわかします。

電波科学の発達

最近そちらで行われた電気通信週間を機会に、アメリカの電信と電話についてご報告いたしましょう。明治のはじめに右大臣の岩倉具視いづくら ともみと大久保、木戸、伊藤などの一行が欧米視察に出

かけて、サンフランシスコに着いたとき、ちょうどアメリカでは大陸を横断する電信が通じた際でもありますので、国務省は二十ドルというそのころの金としてはたいした費用を使って歓迎の電報をうち、さようしからばとシャチホコばった岩倉さんのあいさつも、モールスふ号のカチカチでワシントンに送られました。それから四年たって、アレキサンダー・グラハム・ベルが電話を発明しましたが、それをいの一にたためしてみた外国人は、当時ボストンに留学していた伊沢修二さんであります。アメリカでは電信も電話も民間の会社がやっております。カストマーすなわちおとくい様に、「早く、はっきり、こんせつに」サーveisすることを、いつもくふうしております。

旅さきでお金をなくしたら、もよりの電報会社へ行つて、じ

ぶんのうちか友達のところに料金さきばらいの電報をうつと、そのへんをちよいと一まわりしてくるあいだに、電報かわせのお金がついているというあんばいです。日本への電報にしてもらいしん紙でなければ受けつけないなどというやぼなことはけつして申しません。ローマ字の電報でも電話でつづりをいったらそのとおりにすぐうつてくれて、お金はあとで電話会社のかん定書につけたしてきます。

たくさん電報をとりあつかう会社や店などにはテレタイプという電気じかけのタイプライターのようなものがあります。こちらから出したいときは、それでうちますし、またこつちへあてた電報も自動的にタツタツタツとかたっぱしからうちだされますから、時間がはぶけるばかりでなく手がかかりません。

このテレタイプが朝から晩までいそがしく動いているのは、新聞社と放送局です。日本へも行っているA・P通信やU・P通信その他大きな通信社の支局では、世界中のニュースをテレタイプでニューヨークの本社にあつめ、それをすばやく編集してアメリカ中の新聞社や放送局へテレタイプでおくりします。

○アメリカの生活のよいところを調べてみましょう。

○アメリカについての書物を読んでおたがいに話し合ってみましょう。

二 他山の石

石にちなむことば

「石の上にも三年」

あの、かたい、冷たい石の上に、三年間もすわっていることを思うと、いかにしんぼう強くしなければならぬかがわかるであろう。がまん強く、苦勞することである。

「石橋をたたいてわたる」

あの、かたい、じょうぶな石橋を、まずたたいてみて、心配

なしと見てからわたるといふのである。用心深いことを表わしている。まじめな、てがたい人の性質を、「あの人は、石橋をたたいてわたるたちだから」といつているのを聞くことがあるが、これである。

もつとまじめな、いや、まじめすぎて、おもしろみも何の味もない人のことを、

「木仏・金仏・石仏」

などともいう。

「玉石こんこう」

ということばがある。玉のようなりっぱなもの、石のようにつまらないものがまじっているといふのである。

「他山の石」

もつとくわしくいえば、

「他山の石をもつてみがけ」

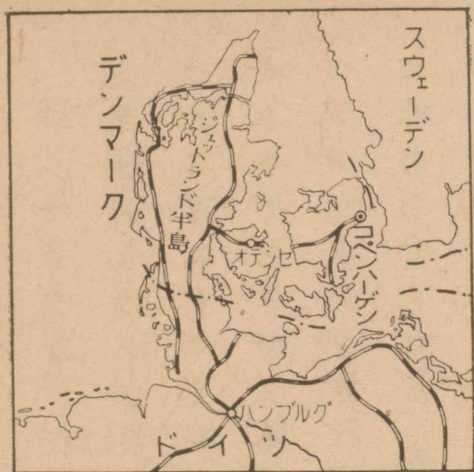
ということばである。よその山の石で自分のをみがくという意味で、ひとのすぐれた点を、どこまでもとり入れて、自分の心をみがくことのたとえにいう。

つぎの話は、外国の話であるが、日本人に反省させるものがあるので、「他山の石」としたのである。

みなさんは、ここから何を学び、何を参考としなければならぬであろうか。

ようこそデンマークへ

「ようこそデンマークへ」



さん橋では、旅行者にとってはきびしい役目を持っている税関の検査官でさえ、こう言う。また、タクシートの運転手は、「ようこそ」

と、運転台から後にもたれかかりながら言う。しかも、それは単に口先だけのことばではない。デンマーク人は、外人客を喜ぶ。また、自分の国を見せることを

喜びとしている。

デンマークは、ジュットランド半島と、四つの大きな島と、五百ばかりの小さな島々から成っている。たて横が百五十マイルと二百二十マイルで、日本の九州に、山口県を加えたほどの大きさであるが、海岸線は四千六百マイルもある。

デンマークを旅行する者は、親しさと、花と、歌をいっばいに味わわせられる。五月には、大きなライラックのしげみが、そのまま色どりのかたまりになる。「金色の雨」(レンギョウの一種)とよばれる小さな木は、一面なだれ落ちるような金色のとばりにおおわれる。六月には、ばらでうずもれる。いなかの十字路にはどこにでも、ロータリーの代わりに、とても大きなばらの花だんがある。交番はまっかなつる花でおおわれる。デンマー

ク人は、年がら年中、花のおくりものをする。男の人にさえも花をおくる。男の人が上着のポケットに花たばをさしているのは、よく見る風景である。

デンマーク人はひとりなら本、三人寄れば歌と決まっている。「うるわしき国ぞあり」。

と歌って、その青い海や、そそり立つ、日にはえたぶなの木の林を細かにたたえる。デンマークの歌には、海と、ぶなの木の出でこないのがあるかどうか、疑わしいくらいである。機会あるごとに、かれらは特別の歌をつくる。町や村は、みなそれぞれ歌をもっている。

だが、花と歌とのかけには、確かな実をもっている。ナポレオン戦争の後、デンマークには、あれ地とかん木の林のほか

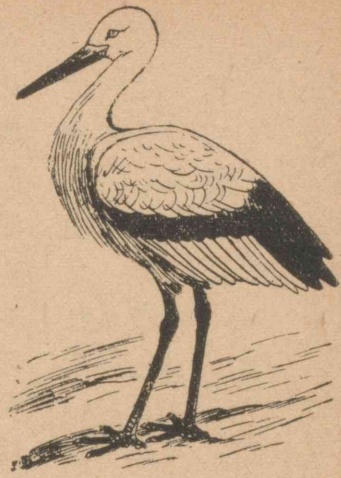
は、ほとんど何物も残らなかつた。しかし、一世紀の後に、デンマークは、世界中でいちばん能率の高い農業国にすがたを変えてしまった。小麦、大麦、からす麦、じゃがいもなど、他の外国の二、三倍もできるようになったのである。

この国には、文字の読めないというような者はほとんどない。あの有名な国民学校には、決まって教えなければならぬものはなく、出席を強制することもなく、試験もない。文部大臣の説明によると、

「学校は一つの教育を完結させるためにあるのではなく、人間精神の中にある何ものかを出発させるためにあるのです。」
というのである。

本の出版数も非常に多く、本のぎっしりつまつた大きな本屋が、いたる所に見られる。詩人といえば、他の国での、博士とか教授とかと同じように敬われている。

一方では、世界最大のデイゼル発動機を生産し、他方では、あの有名な童話作家アンデルセンを生み出している。比率にすると、他のどの国よりも、ノーベル賞をもらっている人が多い。デンマークの医学は非常に進歩している。医学の多くの部門の専門家たちの共同研究によって作り出された血清は、全世界に送り出されている。デンマークは、けっかくをほろぼす事業に多くの努力をはらっている。けっかくによつて死ぬ率も、世界で最も低い。



デンマークの国民は、だれが見てもわかるように、法律に忠実である。この国民性を、どういう風にして養っているかとたずねられると、デンマーク人は、

「私たちは子どもを育てる時、『こうしてはいけない』とは言わずに、『そんなことをする人はありませんよ。』と言ってきかせます。」と答える。

アンデルセンの国でなければ起こらないようなことが、つぎつぎと起こってくる。重要な都会の広場で、こののとりがゆうゆうと十字路へ歩み出るようなことは、この国以外のどこで見られよう。立番のおまわりさんが、まけずおとらずゆうゆうと

その鳥をつかまえて、交番に連れて行き、交通のじやまになると言うと、内勤の部長さんたちはまた、たいへんていちようにそれをいたわるのである。

デンマークは、六月ごろには、太陽が十一時ごろにしずむので、夕ぐれは長い。アンデルセンの生まれたオデンセの歩道を歩いていると、だしぬけに、横町から美しい音楽が近づいて来た。と思うと色あざやかな上着を着、まっかなズボンをはいたひとりのわか者が、自転車のペダルを、ひょうしをとってふみながら、両手でアコーディオンをひきひき現われた。それは、いかにもアンデルセンの町らしい一風景であった。

自転車で思い出したが、デンマークに行ってみたことのない人は、自転車がどんなに役だつものかを、どうてい理解するこ

とはできない。人口四百万のこの国に、五百万台の自転車が
ると言われている。週末には、一家そろって自転車で遠出をす
るが、赤んぼうは父や母の車の後についている小さなひき車に
乗せられる。車輪は、食料ぶくろや荷物で見えなくなっている。
犬やねこは、かごの中に入れられる。私は、犬とねこが同じか
ごの中で、たがいにもたれかかりながら、うつりゆく外の景色
をおとなしくながめているのを、見たことがある。

デンマーク人にとって、食事は楽しいひとときである。主婦
は、テーブルを各国の国旗でかざり、色とりどりのリボンや、
お客たちの国の国旗をかたどった座席票などで、しよぎばん
のように作りあげる。そうして、みんな楽しく食事をする。

このように、みんな楽しくくらす国であるから、動物たちも

この上なくしあわせである。馬、犬、ねこ、鳥、しか、あひる、
白鳥、がちよう、牛……それらはみな、デンマーク人といっし
よに、愛しあつてくらしている。コペンハーゲンの、目をみは
るような美しい遊園地では、大勢の人々の間をあひるが歩き、
あひるの間を人が歩いて、たがいに礼儀を正しくしている。

○文化国家という感じは、どこで見られますか。

○「観光日本」「平和日本」をめざすわたしたちにとって、どこを参考にし
たいと思いますか。

三 鉄道開通

人物 幸治 一郎・ひとし 正吉 きみ子 よしえ みっちゃんのにいさん。

場所 おかの上。むこう側は見物には見えないが、切り通しのおかげになっていて、新設の鉄道が、その下を左右に通っているつもり。空はよく晴れて高く広く、おかがくっきりとうかびあがって見える。かみ手よりに、ただシグナルの頭だけがのぞいている。がけの近くには、木のさくがゆわえつけてある。だれもない。しずかに、小鳥の声。

幸治、旗をかついでかけてくる。

幸治 おうい、ここだよ。

一郎、正吉、きみ子、よしえ、長い旗ざおなどをついで、続いてかけてくる。みな、木のさくのそばに行つて、「やあ、いいなあ。」「よく見えるなあ。」などとさけびながら、見わたし、また、見おろしする。

幸治 ね、ここがいちばん遠くまで線路が見えるんだ。ほら、シグナルも見えるよ。汽車が来る前には、あれがおるんだって。

よしえ まあ、あれが？

一郎 なんかの、旗みたいだね。

幸治 汽車、早く来るといいなあ。

正吉 あつ、停車場つ、新しい停車場の屋根。

一郎 ほんとうだ。あの農業倉庫のむこう。

きみ子 ねえ、ぬまの水の青いこと。

よしえ 空も青いわ。

幸治 何もかもが、みんな新しいみたいだ。水も、空も、山も。

正吉 うれしいなあ。

きみ子 あたし、こんなにわくわくしてるの。

よしえ あたしも。

幸治 さあ、始めよう。

みんな (口々に) 「始めよう。」「始めましょう。」

一郎 きみちゃんとよっちゃんは、このへんをきれいにしてよ。
ぼくたち、ここへ旗を立てるんだから。

きみ子 よしえ ええ。いいわよ。

正吉 さあ、ここをほって、くいを立てるんだ。

幸治 そして、それに旗ざおをしぼりつけるんだ。

正吉はくいあなをほり、一郎と幸治は旗ざおにひもとりつける。女の子たちは、石ころやごみをひろってはすて、ひろってはすてる。が、すぐ新しい風景に見とれてしまう。

よしえ ほんとにいいわねえ。鉄道の線路って、きれいわねえ。あ

んなにきちんとならんで、あんなに遠くまで続いているわ。

きみ子 きれいわねえ。あの山にかくれて見えないけれど、あすこ
をまわると、中学校の町だわね。早く行ってみたいわ。

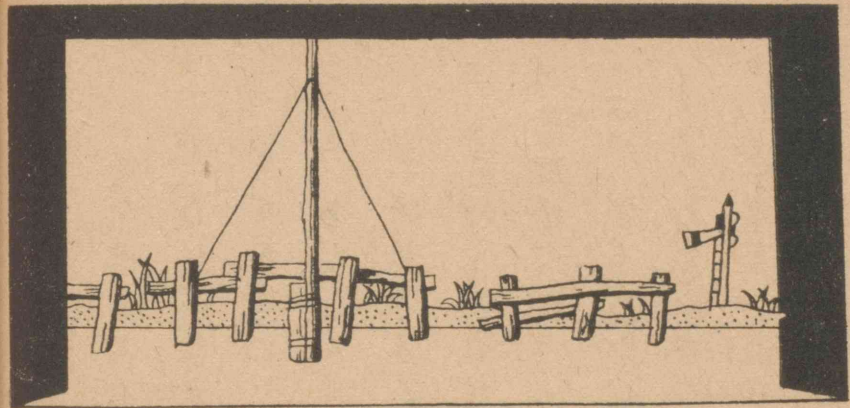
よしえ あたしも。あたしたちも中学校へ行くとしたら、もう、

二時間も歩かなくていいのね。これから。

正吉 ぼくたちだってそうだよ。にいさんなんか、暗いうちに
起きてかよったんだだけね。

きみ子 そうだわね。うちのおとうさんもいったわ。ほら、あ
のぬまのむこう岸の町へなど、買い物に行くのにも、船で
半日もかかったのに、これからは三十分で行けるんだって。

幸治 ぼくは、この汽車がかようようになったら、あの山のむ



ここの、むここの、東京までも行つて
みたいなあ。

みんな（口々に）行きたいわねえ。行きたいなあ。

きみ子 ああ、あたしほんとうに行きたいわ。

ああ、行きたいっ。

一郎 きよう来る汽車に乗せてつてもらおうか。

きみ子 けど、おあしある？

一郎 ないや、ぼく。

よしえ けど、ほんとうに行きたいわねえ。ねえ、きみちゃん。汽車、どつちから来ると思う？

きみ子 知らないわ。幸ちゃん知ってるでしょう。おにいさんが

駅へ出るようになったんだから。

幸治 うん、知ってるよ。あつちの山のむこうからだって。

正吉 幸ちゃん、汽車、十時っていつたつけね。

よしえ きみ子 十時？ 幸ちゃん。

幸治 そうだよ。十時きっかりだよ。

一郎 正吉 早く見たいなあ。

よしえ きみ子 ほんとに、早く見たいわ。

幸治 ぼくだって。

よしえ ねえ、幸ちゃん。おにいさん、もう停車場へ行つた？

幸治 ああ、とつくに行つたよ。けさ早く行つたよ。

きみ子 あたし見たわよ。行くのを。

正吉 ぼくも見たよ。新しい、いい服を着てね。

きみ子 そして、新しいぼうしに、ぴかぴか光る大きなきしよ
うがついてたわ。

よしえ 幸ちゃんのにいさん、駅で何するの？

正吉 きつぷ切るの？

きみ子 ちがうわね。幸ちゃん。

幸治 にいさんは声がいいからってね、汽車が着いたら、駅の
名を言うんだって、大きい声で。

一郎 そう？ どんなに言うんだい？

幸治 ぼく、言えないんだよ。

きみ子 ねえ、言いましたよ。幸ちゃん、言ってもいい？

よしえ 聞かせて、聞かせて。

きみ子 ねえ、こう言うの。「きおろしイ、きおろしイ、どなたも

おわすれ物のないように願いまアす。きおろしイ、きおろ
しイ」って。

よしえ うまいわねえ、きみちゃん。

正吉 きみちゃん、いつの間におぼえたの？

きみ子 だって、おとなりなんですもの。それに、ひと月も前か
ら、毎日々々、朝からばんまで聞いているんですもの。

一郎 そんなに、にいさんけいこしていたの？ 幸ちゃん。

幸治 ああ、そうなんだよ。にいさんたらね、毎日、さとう水
ばかり飲んで、は、「きおろしイ、きおろしイ」ってやってる
んだよ。で、ね、夜、ねどこへはいつてまでも、小さい声
で、「きおろしイ」って練習してるんだよ。

一郎 そしたら、きょう、汽車が駅へ着いたら、あのへんから
ひよつとしたら、幸ちゃんのにさんの「きおろしイ」って
言う声が聞こえるかもしれないね。

よしえ そうね。聞こえるとうれしいわね。幸ちゃん。

きみ子 それから、たばこ屋のみっちゃんのにいさんが、駅の売
り子になったの、知らない？

正吉 売り子って、なあに？

きみ子 おべんとうや新聞など売る人のことよ。

一郎 いいなあ。駅でおべんとう売るのは？ そんなら、ぼく、
買いに行こう。いくらだろう。

正吉 どんなおべんとうだろうね。のりまきもあるかしら。

きみ子 みっちゃんが言ってたけどね、うなぎどんぶりも、洋食

べんとうってのもあるんだって？

幸治 洋食べんとうって、どんなだろう。

一郎 ぼく、洋食知ってるよ。平たいおさらに入れてあってね、
ナイフやおさじで食べるんだよ。

幸治 おはしはないの？

一郎 うん、おはしのかわりに、ナイフやおさじを使うんだよ。
よしえ そしたら、洋食べんとうにもナイフやおさじがついてる
のでしよう。そんなら高いわね、きつと。

きみ子 あら、話しこんでしまって、おそうじするのわすれてい
たわ。

正吉 そうだ、早くこのへんをきれいにしていよう。

幸治 ぼくたちも、早く旗ざおを立ててしまおう。

一郎 そうだ。ほら、さおだ。ひもも、もうつけたよ。
正吉 よし、ぼくがしぼるよ。しつかり持っていてね。

くいを打ち、それに、旗ざおをしぼりつける。そうじていたよしえ、遠くに
ひとしのすがたを見つける。

よしえ あら、あれ、ひとしさんじゃない。
きみ子 ほんとうだわ。

よしえ きみ子 ひ、と、し、さあん。

ひとしの声(遠く) おうい、きーみちやあん。

一郎 ひとしさんだ。おうい。走れ走れ！ 早く早く！

(手に持っている旗を大きくふる) おくのおばさんの家へでも行つ
てたのだからか。あっちの方からかけて来るよ。

正吉 ゆうべさそいに行つたとき、とまりに行くっていった

から、とまったんだよ。

よしえ ひとしさん、早いわね。(わらう) あんなにおどけながら走
つて来るわ。

みんな(わらって) 早いぞう、ひとしさあん！(手をたたいてわらう)

ひとし(かけつける) おはよう。みんな。

みんな おはよう。

ひとし 汽車、もう行つちやつた？

一郎 まだだよ。だいじょうぶだよ。

ひとし そう。ああ、よかった。ぼくね——食べないかい。(せん
べいを出して、みんなにやる) おばさんどこでもらつたんだ——ぼ
くね、汽車見られないかと思って、朝ごはんも食べないで
かけて来たんだ。

よしえ だいじょうぶよ。幸ちゃんのにいさんが十時だって言っ
たんですもの。

ひとし そう？ 安心した。ああ、やっぱりここへ旗立てるの？
ぼくも手つたうよ。

一郎 そうだよ。あの柱の……幸ちゃん、あれ、何ていったっ
け、あれ。

幸治 シ、グ、ナ、ル、だよ。

一郎 そうだ、そうだ。シグナルの横についてる、あの旗みた
いな板がさがると、ぼくたち、この旗を、するするっとあ
げるんだ。

幸治 汽車が来る五分前には、あれがさがるんだってさ。

正吉 そうすると、むこうに汽車が見えるんだ。

ひとし ゴオーツて、やって来るんだ。

きみ子 汽車がこの下を通るとき、(かん高い声で)ピーツて、汽
きを鳴らすの。

みんな、とたんに「ワッ」と両耳をおおう。その手をはなして、「ああびっくり
した。」「すごい声。」などと言う。

きみ子 そしてあたしたち、きのう作った小旗をふって、ばんざ
い！ って言うの。

よしえ お客さま、見あげるわね。

幸治 どんな人が乗ってるだらうね。

正吉 さあ、早くしよう。しぼるよ。

ひとし きみちゃんとよっちゃん、あの旗みんな持って来てよ。

きみ子 よしえ ええ、いいわ。

よしえ それから、おとうさんやおかあさんもよび出して、みんなに旗持たせて来るわ。

正吉 そして、しげちゃんやまさおちゃんなど、みんなひっぱって来てね。

きみ子 いいわ。

よしえ うんとかけて行つて来るわ。

ふたり、かけだす。

男の子たち たのんだよう。

旗ざお立つ。

幸治 よし、さあ、旗だ。そのひもにむすびつけて。

旗をひもにつける。

正吉 できた。

一郎 あげてみよう。

旗するするとさおの先まであがる。

みんな (はくしゅしながら) できた、できた。汽車、早くこーい。

正吉 汽車、まだこないから、おろしておこーよ。

三人で、旗をおろす。

幸治 もう、何時かしら。

ひとし 九時半ぐらいじゃないかしら。おばさんどこ出たの、九

時だったから。

正吉 ねえ、この旗あげるの、だれにするの？

一郎 ぼくっ。

みんな 「ぼく」「ぼくにあげさせて」など、口々にあらそう。みっちゃんのにいさんが来る。だれからともなく見つけて、あらそいをやめ、そっちを見つめる。

みっちゃんのにいさん登場。

にいさん みんな、汽車見に行かないの？

幸治 ぼくたち、駅へは行かないんだ。ここで見るんだよ。

正吉 ここでかんげいするんだ。

ひとし この旗をあげてかんげいするんだよ。

にいさん なるほど、ここはよく見えるね。汽車はこのがけのま下
を通るんだね。

一郎 みっちゃんのにいさん、駅のおべんとう売りになったん
でしよう。いいなあ。

にいさん だれから聞いたの？ そんなこと。

正吉 きみちゃんがそう言ったよ。

幸治 ぼくのにいさんも駅員になったんだよ。「きおろしイ」っ

て言うんだよ。

にいさん おや、そうかい。

ひとし みっちゃんのにいさん、何と言っておべんとう売るのが？

にいさん 知らないよ。

みんな 教えて、教えて。

幸治 教えてくれなきゃ、いや。

みんな そうだ、そうだ。

にいさん 知らないいったら、こまったなあ、あと十五分しかないの
に。急ぐんだよ、ぼくは。

みんな 何時に十五分？

にいさん 十時に。

みんな しめたつ。あと十五分。がんばれがんばれ。

ひとし さあ、教えて、ねえ。

みんな ねえつたら、ねえ。みつちゃんのにいさん。

にいさん こまったなあ。あやまるから通しておくれよ。

みんな いやいや、教えなきゃ、いや。

にいさん よわつたなあ……。じゃ、教えるよ。

みんな 教える？ ほんと？ にげるんじゃない？

にいさん 教えるから通してよ、ね。

みんな よしつ、通してあげるよ。さあ教えて。

にいさん よわつたなあ、じっさい。

みんな 早く教えて。何て言うの？ ねえ！

にいさん うーむ。……ね、こう言うんだよ……。こまったなあ、こ

う言うんだよ。いいかい。「ええ、べんとうべんとう、新聞

にじんたん、おせんにキャラメル、お茶アお茶ア、ラムネ

にサイダー、さくらもちイ、ええ、べんとうべんとう、洋

食べんとうにお茶アお茶ア。(かけたそうとする)通してよ。や

くそくじゃないか。さあ、通して。

みんな ね、もう一ぺん。もう一ぺん。

にいさん (ふたたび時計を見る) あつ、あと十分だ。おくれたらたいへ

んだよ。

みんな えつ。あと十分？ 十分だ十分だ。

一郎 ねえ、早く！

にいさん よわつたなあ。ね、こんどまた教えるから、きょうだけ

通して。お願い。

みんな あした教える？

にいさん うん、あしたでもあさってでも。

みんな よし、じゃ、あした。

にいさん うん、あした。

正吉 よし、みんなはなせつ。

にいさん 走り去る。

みんな あしただよーつ。

みんな、見送ってわらいころげる。そのまま汽車の形につながって。

ガツタンゴツコ ガツタンコ 汽車よ来い

遠い都の町のひや

知らぬお国の山の色

お窓にうつして汽車よ来い

ガツタンゴツコ ガツタンコ 汽車よ来い

青いバナナや夏みかん

赤いりんごに雪のせて

おみやげいっぱい汽車よ来い

きみ子 よしえ、小旗をかかえてかけて来る。

きみ子 乗せてちょうだい！

よしえ 乗せてちょうだいなあ。

幸治 (汽車の列をはなれて) 「きおろしイ、きおろしイ、どなたも、

おわすれ物のないように願いまアす。

ひとし (列から出て) 「ええ、べんとうべんとう。新聞におせんにキ

ヤラメル、お茶アお茶ア。ラムネにサイダー。名物さくら

もちイ。ええ、べんとうべんとう。」

一郎 きみちやんとよつちゃん、早く乗れよ。

よしえ ちよつと待って、幸ちゃんの駅員さん。あたし、時計持
つて来たのよ。(目ざまし時計を出そうとして) あら、もう五分前
よ。

みんな (口々に) 「なに、五分前?」「五分前だって?」

幸治 シグナルは?

みんな (ふりむいて見る) まだだ。

幸治 もうおりるはずなのに。汽車は? (がけぎわへかけよる)

みんな (つづいてかけよる) まだ見えない。

きみ子 あら、動いたわよ、いま。

みんな 動いた? (シグナルを見る)

とたん、シグナルちよつと動いて、ガチャリとおりる。

みんな ばんざい! そら、旗だ。旗だ。

みんな旗ざおに走りより、先を争ってひもを引く。旗はするするとあがりかけて、
ひもが切れる。

みんな あつ。(口々に) 「だめだ。早くむすべ。」「だめじゃないの。」

「汽車来ない?」「早く早く。」

幸治 よしつ。ぼくをだいてくれつ。さおの先へむすびつける
んだ。

正吉 よしつ。ウマを作れ、ウマを作れ。

一郎 ひとし。そうだそうだ。ウマだウマだ。(三人でウマを作る)

幸治 (ウマにのりながら) いいか、しつかりしろつ。

三人 だいじようぶだ。早くやれつ。

幸治 もう少し。

三人 早くやれよ。汽車来ちやうぢやないか。

女の子ふたりは、汽車を案じて、この間はらはらしている。

よしえ まだ、だいたいようぶよ。

きみ子 汽車、まだ来ないわよ。

幸治 ……よし、できた。(とびおりる)

旗、さおの先で風にひるがえる。

みんな ようし、うまいうまい。ばんざい！ 汽車は？

きみ子 よしえ。(小旗をわたしながら) 旗、旗、旗を持って、旗を持つて。

みんな 来たぞつ。(ざわめき、すぐ、しんとなる)

幸治 あつ、見えたつ、あの山の下。

みんな どこだどこだつ。

幸治 あすこ、あの家のところ。

ひとし 木にかくれた。

みんな ……出たつ。見えた見えた。

汽てきがひびく。

みんな ばんざい！

きみ子 あんなにけむりを出して。

一郎 まっ白いけむりだ。

幸治 早いねえ。

よしえ 早いわねえ。

正吉 ながあい虫みたいだ。

ひとし あつ、旗つけてるよ。

きみ子 あつ、目があるわよ。
みんな 大きいなあ。

みんな、旗をふって、足ぶみしながら歌う。

ガツタンゴツコ ガツタンコ 汽車よ来い
青いバナナや夏みかん
赤いりんごに雪のせて
おみやげいっぱい 汽車よ来い

ガツタンゴツコ ガツタンコ 汽車よ来い
青いお空をつんざいて
村から村へ汽車のふえ
ガツタンゴツコ ガツタンゴツコ 汽車よ来い

列車のごう音、しだいに近づく。みんなの視線に従ってひくく。

きみ子 あつ、まどからのぞいているわ！

ひとし 男だつ。

よしえ 女の入も。

幸 治 こつち見てるよつ。

きみ子 みんなのぞいているわ。

みんな ばんざい！

列車のごう音いよいよ高く、がけの下を通る。

みんな ばんざい！ ばんざい！ ばんざい！

旗をふってばんざいの声のうちに

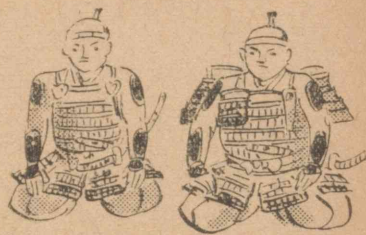
— 幕 —

四 ともに歩む

つぎの二つの話は、何ものかをあなたに教えてくれることと
思います。こういう話の中から、自分の身につける教えを読み
とることも、国語の勉強としてたいせつなことです。

ともに歩む

九代目団十郎といえは、明治時代ではむ
ろんのこと、かぶき始まって以来のすぐれ
た役者だと言われた人です。



何のしばいであつたか、はつきりしませんが、
この人が、みごとなよろいを着た大将のみなり
で、たくさんの家来を左右に従えて、ぶ台の正
面の、一だん高い所に腰をおろしていました。
その時、花道から、今でいえば、伝令にあたる

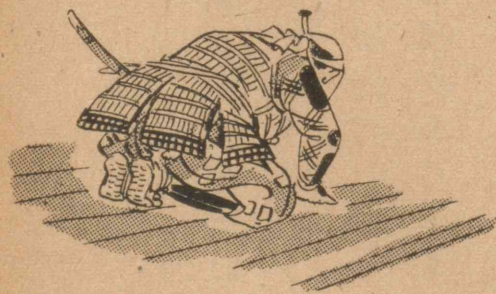
でしよう。

「御注進、御注進」

とさげんで、ひとりの家来が出て来ました。そ
して、花道の中ほどで両手をつき、団十郎の方
に向かつて、

「申しあげます」

と言いました。団十郎は、その大きな目玉をぎ



ろりと光らせて、

「何ごとなるぞ。」

と問い返しました。ところが、きのどくなことに、その家来は、まだ、ぶ台にはふなれだったとみえて、そのあとのせりふがうまく口に出てきません。家来はただ目をぱちくりさせて、団十郎の方を見ているだけです。団十郎は、それでは気がぬけるものですから、もう一度、

「何ごとなるぞ、早く申せ。」

と、さいそくしました。

さあ、そうになると、家来はいよいよよろたえるばかりで、もう団十郎の顔を見る元気もなくなり、顔を花道につつぷせてしまいました。

見物席がざわつきだしたのは、いうまでもありません。ぶ台に居ならんでいる家来たちも、顔を見合わせて心配そうにしています。

ところが、団十郎だけは、この時、じつと目をとじていました。そして、しばらくたって目を開くと、静かに家来を見まわし、つぎに、花道の家来の方を見て言いました。

「さては、ひみつのことであるう。ちこう、ちこう。」

そう言われて助かったのは家来です。かれは、その声に應じて、飛ぶように団十郎のそばまで進んで来ました。

すると団十郎は、持っていたおうぎを開いてふたりの顔をかしくし、何かひそひそと語り合いました。何と言ったかわかりませんが、多分、

「これから、もっとせりふを勉強するんだぞ。」
とでも言ったのでしよう。

さて、ひそひそ話が終ると、団十郎は、もどどおりにおうぎをたたみ、それでよろいのむねをはったとたたいて、

「うむ、心得た。早く行け。」

と、いかにも家来をはげますように言いました。そこで家来は、おどるようにして花道を去って行ったということですよ。



みなさん、この話のどこまでが本当なのか、私にもうけあえません。しかし、私は、これはじつにおもしろい話だと思えます。おもしろいというのは、ただおかしいとい

うだけのことでありません。

それには、深い教えがふくまれているのです。

みなさん、この時、もし団十郎が、きまりどおりのせりふを言つてさえおれば、それで自分の役目は果たせると考えて、うまくその場をきりぬけなかつたとしたらどうでしょう。しばいは、それでだめになつたにちがいありません。しばいがだめになれば、家来ばかりでなく、団十郎自らも赤はじをかいてしまったにちがいないのです。

人間の世の中も、ちょうど、このしばいのようなもので、自分だけ正しければそれでよいというわけにはまいません。何よりもよいことは、みんながあやまちをおかさないことです。

しかし、世の中は、そう思うようにいくものではありませんから、おたがいに、自分の力のある限りをつくして、他人の足りないところを補っていくことがたいせつです。

偉い人ほどその心がけがありました。しゃかやキリストなどは、どんな罪深い人とでも、ともに歩むことをいとわなかつた人たちなのです。

天分を生かす

福島県地方はおうとう（さくらんぼ）のさいばいのさかんなところですが、大正十三年の夏に、おうとうの葉をなめつくすような、おそろしい新害虫があらわれ、一年二年とたつうちにその害は、伊達、信夫の両郡の全体にひろがり、手のつけられ

ないようなありさまになってきました。

さいばい者たちは、いっしょうけんめいに薬品をまいたりして、その駆除につとめました。さてふしぎなことには、その薬品をまきはじめると、その地方でかっているかいこがみんな死んでしまうのです。だんだん調べてみると、その薬品が風のためにくわ畑にも飛んでいってくわの葉につく。すると、そのくわの葉をくったかいこはみんな死んでしまう。ということがわかってきました。

さあ、そうになると、ようさん家の方がだまっています。「薬をまくのはやめろ」という。おうとうさいばい者は、「いややめぬ」という。そこでどの村でもようさん家とおうとうさいばい者とが二派にわかれて大げんかをはじめそうになってきました。

このさわぎの中で、ただひとり、だまって害虫の研究をつづけていた青年がありました。それは大石俊雄としおという人です。

この人は、子供のころから、虫好きで、いろんな虫をびんに入れて養ったり、標本を作ったりすることを何よりの楽しみにしていました。小学校をでると高等小学校にはいりましたが、あいかかわらず、虫に興味をもちつづけて、道ばたにちよつとかわった草の葉でも見つけると、何か虫がついてはいないかと、それを自分の家に、持ちかえって、くわしく調べてみるというふうでした。それがあとでは、だんだんと学者のような研究にまで進み、卒業後はある先生といっしょに、博物館を作ったり、小さな研究室をもうけたりして、ますます研究を進めていきました。

そこへ、この大正十三年の害虫さわぎが起こったのです。そこでかれは寢食をわすれて研究をつづけ、その結果、その虫が幹の根元にたまごをうみつけ、そのたまごが春になると虫になって上にのぼっていくことを発見したのです。

かれは考えました。

「薬品をむやみにえだや葉にまきちらさなくても、春さきに、根元に近い幹のまわりに、何か薬をぬっておいて、虫が上のぼれないようにしておけば、それでいいのだ。」

そこで、さつそく幹にぬりつける薬品を研究し、それを自分の畑のおうとうにこころみてみました。すると、それがみごとに成功して、ほかの畑ではあいかかわらず大さわぎをしていますのに、自分の畑だけには一ぴきの害虫もいなくなつたのです。

その後、この駆除法が広く用いられるようになり、ようさん家とおうとうさいばい者とのあらそいもことなくすんでしまいました。

かれは、このほかにも、たくさんの新しい害虫を発見しています。その中には、「大石」の名にちなんだラテン語の学名がつけられ、世界の学界に発表されたものもあるくらいです。

ここで、わたしたちのひじょうに感心することは、かれは害虫研究のためにけっして家業をおこたつてはいないということ。家業をおこたらないどころか、町のいろいろの団体や公共の仕事のためには、いつもそっせんして働いているのです。

こういう人をこそ、ほんとうに「きょうぐうを生かし」また「天分を生かし」ている人というべきでありましょう。

天分というものは、このように、専門の学校にはいかなくとも、また家業はちがつていても、熱心に生かそうとつとめさえすれば、必ず生かされるものです。たいせつなのは熱心と努力です。

それにつけても、おたがいにいましめなければならぬのは、自分の天分をかるがるしくきめてしまうことです。

世間では、子供のころ少しばかり作文や絵や音楽ができる、すぐそれを自分の天分だと心得て、小説家や画家や音楽家になろうとこころざし、ほかの勉強をおろそかにする者があります。これはとんでもない軽はずみで、一生をあやまるものになります。ほんとうの天分というものは、ひととおりのいろいろな学科に努力してみなくては、わかるものではありません。努力

しているうちに、自分でも思いがけない天分が自分にもめぐまれているのを発見するものです。エジソンがそうでした。ニュートンもそうでした。そしてまたこの大石俊雄がそうでした。多くの天才は努力によって自分の天分をほり起こした人たちなのです。小さいころから、はっきり自分の天分を自覚していた人は、むしろまれだといってもいいくらいです。

かように、天分を生かすには、まず何が自分のほんとうの天分であるかを発見しなければなりません。それには努力を要します。また、天分を発見しただけでは、その天分は生かされません。それを生かすものはやはり努力です。努力によって、天分を発見し、努力によって天分を育て、そしてそれを、ひとびとのお役に立てる。これが「天分を生かす」ということです。

五 光を求めて

もうすぐ卒業だと思つくと、
私は、何かしら、むねの高鳴りをおぼえる。

過ぎ去つた六年間。
なつかしい六年間。
長いようで短い、
短いようで長い、
小学六年間の思い出のアルバム。
そして、さらに、
ゆくてのゆめをえがく。

ときどき先生がおっしゃった。

「あなたがたの中には、

未来の政治家がいる。

科学者がいる。

芸術者がいる。

技術者がいる。

実業家がいる。

何でもいい、あなたがたの新しい力で、

新しい世界をつくるのだ。」

このことばが、今さらのように心の中を駆けめぐる。

二宮金次郎、野口英世、

高嶺^{たかみね}震吉^{じょうきち}、御木^{みき}本幸吉^{ほんこうきち}、

リンカーン、アンデルセン、

ミケランジェロに、レオナルド・ダ・ビンチ、

ペスタロッチに、福沢諭吉、

今まで聞いたすぐれた人々の名が、

心の中を駆けめぐる。

あんな人になれるだろうか。

ばかな、そんな大きなゆめはよせ。

ゆめでもいい、
そのゆめをおうのだ。
いや、もっと平ぼんでもいい、
正しい人でさえあれば。
こんなゆめがつづく。

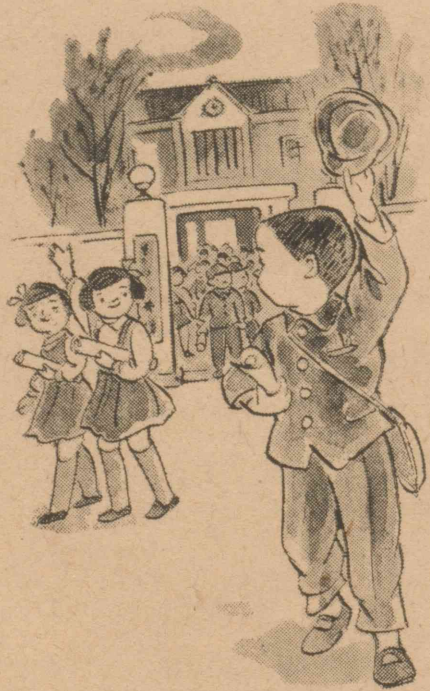
ゆめ、ゆめ、
たのしいゆめ。
ゆめは光だ。
人生の光だ。

私はゆめをおって進む。
光を求めて進む。

まっしぐらに進むのだ。

○「思い出のアルバム」という題で、小学校六年間の作文や詩をつくってごらんなさい。

○ あなたのこころに残っているすぐれた人たちの伝記を調べてみましょう。



ことばの表

あおえんどう	三	おつぎ	三	がちょう	三	クリーム	二
あかはじ	三	おうとう	六	かなぶつ	三	クリスマス	五
アコーディオン	元	おうべいしきつ	六	かるはずみ	七	けじめ	七
あさはん	七	おくさん	二	かんげい	七	けっかく	七
あひる	三	おゆ	九	かんけつ	六	けっせい	七
あぶらがみ	一〇	おかさな(おかす)	九	かんげく	六	けらい	七
あれち	二〇	おきなつて(おきなう)	六	かんづめ	九	けんさかん	六
アルゼンチン	三〇	おくりもの	二五	〇きたたいへいよう	四	けんぶつせき	三
〇いうまでもありません	三〇	おせん	五	ぎじゅつ	四	こうきよう	三
いがい	二〇	オデンセ	二	ぎしよ	七	こうとうしよがつこう	六
いしばし	二〇	おどける	四	ぎしよ	七	こうのと	六
いしほとけ	二〇	おとらす(おとる)	二	ぎしよ	七	こうのと	六
いとわなかつた(いとう)	二〇	おまわりさん	二	ぎしよ	七	こうのと	六
いならんで(いならぶ)	二〇	おわすれもの	二	きぶつ	二	こうのと	六
いましめる	七	〇かいがい	四	きしよ	七	こうのと	六
いらい	七	〇かいしや	八	きしよ	七	こうのと	六
〇うたがわしい	二〇	がいしや	八	きしよ	七	こうのと	六
うつりゆく	三〇	がいしや	八	きしよ	七	こうのと	六
うりこ	四〇	かすたマー	七	きしよ	七	こうのと	六
うるわしき	二五	かつどう	八	きしよ	七	こうのと	六
うるたえる	二〇	かぎよう	七	きしよ	七	こうのと	六
うんてんしゆ	八	がくかい	七	きしよ	七	こうのと	六
〇エンジン	三〇	がくめい	七	きしよ	七	こうのと	六
えきたい	三〇	かたどつた(かたどる)	三	きしよ	七	こうのと	六
〇おあし	三〇			きしよ	七	こうのと	六

サンドウィッチ	一〇	〇スカーフ	四	つみ	六	のうぎようそうこ	三
さんばし	三	スウィッチ	八	つる	五	のうじよ	二
〇じかく	三	すみよい	四	〇ディーゼルきかん	二	〇ハイスクール	二
シグナル	三	〇せいかん	三	てがたい	二	はえた(はえる)	二
しげみ	三	せいき	三	でんれい	二	はくちよう	三
しゃか	三	せいじ	八	でんれい	二	はくちよう	三
しゃりん	三	せいようチンヤ	二	でんれい	二	はくちよう	三
ジャケツ	三	ゼリー	二	でんれい	二	はくちよう	三
しゃしよ	四	せりふ	二	でんれい	二	はくちよう	三
シヤム	二	セロファン	二	でんき	五	はくちよう	三
シヤレ	二	せんもんか	二	でんきつうしん	六	はくちよう	三
しよせつか	七	せんろ	二	でんき	六	はくちよう	三
しよくりようひん	二	〇ぞ	二	でんき	六	はくちよう	三
しよくたく	九	そそりたつ	二	でんき	六	はくちよう	三
しよがっこう	八	そっせん	二	でんき	六	はくちよう	三
したじゆんび	八	〇だいどころ	一〇	でんき	六	はくちよう	三
じどうちようせつ	九	たいしよ	六	でんき	六	はくちよう	三
じどうしや	九	だいま	六	でんき	六	はくちよう	三
じゆまつ	二	たかなり	三	でんき	六	はくちよう	三
しゆふ	三	たかみねじよきち	三	でんき	六	はくちよう	三
しよぎばん	三	タクシー	三	でんき	六	はくちよう	三
しんしよをわすれて	六	たさんのいし	三	でんき	六	はくちよう	三
しんせい	六	たちばん	三	でんき	六	はくちよう	三
しんぼうづよく	六	たてよこ	三	でんき	六	はくちよう	三
(しんぼうづよい)	二〇	だんじゆらう	六	でんき	六	はくちよう	三
しんぼうや	二〇	〇チョコレート	五	でんき	六	はくちよう	三
	二〇	ちなむ	二	でんき	六	はくちよう	三
	二〇	〇つつぶせて	二	でんき	六	はくちよう	三

Copyright 1950, by
The Kyōiku Tosho Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小国 637

六年生の国語 下

Approved by Ministry of Education
(Date 1950)

感謝

左の作品を本書に掲載させて
いただいたきましたことについ
て、著作者諸先生に心から感
謝をいたします。なお、規則
や指示にしたがつて多少加除
訂正のやむをえなかつたこと
について御諒解をお願いいた
します。

アメリカだより…坂井 米夫
鉄道開通…内山 嘉吉

編者

東京都文京区大塚窪町
東京高等師範学校附属小学校内
理事 長 東京高等師範学校教授 佐藤保太郎
担当執筆者 東京高等師範学校教諭 田中豊太郎
花田哲幸
青木幹
森下
小島忠
杉浦石夫

表紙

田原輝夫

印刷 昭和二十五年 月 日
発行 昭和二十五年 月 日

定価 円

著作者 財団法人 教育図書研究会

発行者 学校図書株式会社

印刷所 代表者 川口芳太郎

代表者 川口芳太郎

代表者 川口芳太郎

発行所

学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地

本書の指通書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のもの無断發行を禁ずる。

プレゼント	六	ゆうはん	八
ふじん	七	ゆきぐつ	三
ぶな	七	ゆくて	三
ふなれ	三	○ようこそ	三
ぶもん	三	ようさんか	三
○へいぼん	六	ようしよく	三
へいわな	四	よこちよく	三
ベスタロッチ	五	よろい	六
ペダル	元	○らいしんし	六
ペーコン	九	ラテング	六
べんごし	八	ラムネ	五
べんとうばこ	二	○れいぎ	三
○ほうりつ	元	れいぞうこ	三
ほこり	四	レンギョウ	二
○まつきいろ	五	○ロータリー	二
○みせ	八	○わくわく	二
みんかん	七		
みきもところきち	七		
○めいぶつ	五		
めだま	六		
○もたれかかり	六		
(もたれかかり)	三		
もんぶだいじん	三		
○やしなう(やしなう)	二		
やまぐちけん	二		
やまのいろ	二		
やさい	三		
○ゆうえんち	三		

票 30 卒 73

修 17 仏 21 検 32 税 23 完 26 律 28

液 13 (臣) 16 (欧) 16 視 16 (迎) 17 (沢) 17

婦 8 (裁) 8 判 8 支 8 (寸) 11 (簡) 12

漢字表

広島大学図書

0130449751

